

## 2021年7月25日聖霊降臨後第9主日説教

列王記下2章1-15節

エフェソの信徒への手紙4章1-7節、11-16節

マルコによる福音書6章45-52節

本日は、7月最終主日です。日曜学校ぶどうの木は、一足先に先週夏休みに入りましたが、各学校も学期が終わり夏休みに入ると思います。新型コロナに関して、今年は昨年より条件が少し良くなりましたので、若い方々には、それぞれよい夏休みを過ごしていただきたいと思います。東京オリンピックも一年遅れで始まりました。わたし自身はスポーツに興味がありません。しかし、この時のために世界中の方が努力して、東京に集まり、その結果を平和の祭典を通して披露する姿が、コロナ禍で苦しむ世界中の人々に、なんらかの希望を与えるは、すばらしいことだと思います。

さて、本日の三つの聖書日課は、スポーツともオリンピックとも当然無関係です。引き出される主題は、弟子として歩むとは、ということです。最初の弟子のお話は、預言者エリヤの弟子、預言者エリシャです。

エリヤは、紀元前9世紀ごろに北イスラエルで活動した預言者です。イスラエル王国が、バール宗教に傾倒し、不正が横行してしまったため、王やバール宗教の預言者たちと対決した預言者です。また本日の旧約日課で「**見よ、火の戦車が火の馬に引かれて現れ、二人の間を分けた。エリヤは嵐の中を天に上って行った**」(列王下2:11)とある通り、エリヤは、主なる神様が嵐の中で天に引き上げることによって地上からいなくなります。つまり死んでいません。そこから彼には、他の預言者とは異なる期待が生まれます。それは、イスラエルが困難に直面した時、エリヤが到来して救済するというものです。福音書の物語で、イエス様についてエリヤに関わる記述があるのは、このためです。

さて、エリシャは、このエリヤの弟子です。そしてその弟子の継承についてのお話が本日の旧約日課です。エリヤは偉大な預言者ですが、エリシャも同じです。「**エリヤはエリシャに言った。『わたしがあなたのもとから取り去られる前に、あなたのために何をしようか。何なりと願いなさい。』エリシャは、『あなたの霊の二つの分をわたしに受け継がせてください』と言った**」(列王下2:9)とある通り、エリヤから半分の霊を受けるのですが、エリシャは、半分以上の奇跡を起こす預言者として有名です。水を清めたり(列王下2:19-22)、未亡人の家の油を増やしたり(列王下4:1-7)、死んだ子を生き返らせたり(列王下4:8-37)、20個のパンで100人を満たしたりと(列王下4:42-44)、わたしたちから見ますと、イエス様の奇跡と類似するような奇跡を行った預言者です(時代的に言えば逆です。イエス様がエリヤとエリシャに似ている)。

本日の後継者となる個所でも奇跡があります。エリヤが外套を丸めて水を打つと、水が二つに分かれたのと同じように、エリシャもそうするのです。エリシャは、エリヤが天に昇った後、落ちてきた外套を取って、「**水を打ち、『エリヤの**

神、主はどこにおられますか』』と言います。「エリシャが水を打つと、水は左右に分かれ、彼は渡ることができた」とある通り、エリシャは、エリヤと同じように、水を二つに分けることができたのです（列王下 2：13：14）。これらの奇跡は、規模は異なりますが、モーセと類似するところもあります。

さて、旧約日課にあるエリヤとエリシャのお話は、模範的な師匠と弟子の継承物語といえます。しかし、本日の福音書に描かれている弟子たちの姿は、そうではありません。もともと、「マルコによる福音書」には、一般的に「弟子の無理解」とよばれる語りのモチーフがあります。マルコの物語において、弟子たちは、イエス様の活動の最初に召命を受けて、使徒とも呼ばれ、活動を共にします。しかし、イエス様の教えも行動もしっかりと理解できず、しだいに失敗を繰り返すようになり、イエス様の逮捕を機に、離散してします。このように弟子たちは、マルコの物語において、「反面教師」として描かれているのです。それが「弟子の無理解」のモチーフです。

「マルコによる福音書」が書かれた時代（年代の推定によって意見は変わりますが）、ペトロなどの使徒たちは、生存しており、また諸教会で活動中であった可能性があります。今現在教会の重鎮である自分たちが、反面教師として描かれていることについてどう思うか、聞きたいところです。しかし、今、立派な活動をしている弟子たちも、一度は失敗された。しかし、主に許されて活動されている、そのことが大切です。教会が、オリンピックのように努力を重ねて何かを達成した人々の集まりではなく（それはそれで大変素晴らしいことですが）、重大な失敗をしたけれども、復活したイエス様を通して、許されて再び集められた人の集まりであることを示すからです。福音書に描かれた無理解な弟子たちの姿は、主なる神様の愛の深さを伝えるのです。

さて、本日の箇所は、先週の五千人の食事の物語からの続きです。その意味では、まだ「弟子の無理解」が明確になっている個所ではありません。しかし、そばを通りイエス様を見ても、イエス様だと気が付かなかったという意味で、その「弟子の無理解」の予兆のようなお話です。

五千人の食事の後、「イエスは弟子たちを強いて舟に乗せ、向こう岸のベトサイダへ先に行かせ、その間に御自分は群衆を解散させられた」（マルコ 6：45）と続きます。イエス様が、弟子たちを強いて舟に乗せた理由は、「群衆と別れてから、祈るために山へ行かれた」（マルコ 6：46）とある通り、イエス様は、群衆とも弟子たちとも別れて、一人で祈るためでした。これはいわゆる「リトリート」や「黙想」の起源ともいえます。イエス様は、大勢の人と一緒に活動するときもありますが、こうして一人で黙想することもあるのです。しかし、お話の中心は、一人で祈るイエス様の姿を描くことではありません。湖にいる弟子たちです。イエス様と離れた弟子たちは、夕方、逆風で湖の上で立ち往生していたのです。ガリラヤ湖は琵琶湖の四分の一ぐらいの大きさですから、決して小さい湖ではありません。漁師が四人もいても立ち往生したのですから、暗いこともあり、かなり心細いことであったと思います。

そのような状況の弟子たちに向けて、イエス様は、湖の上を歩いて舟に近づ

きます。そして、助けるのではなく通り過ぎようとされるのでした。イエス様はプロの漁師たちでも苦勞している状況に近づき、それとわかりながらも、今時の表現を用いるならば、「スルー」しようとしたのです。

イエス様がそのような行動をしたせいでしょうか、「**弟子たちは、イエスが湖上を歩いておられるのを見て、幽霊だと思い、大声で叫んだ。皆はイエスを見ておびえたのである**」(マルコ 6:49)とあります。二千年前にも幽霊の概念があり、それを恐れる描写があるのも面白いのですが、暗い所で、湖の上を歩く人がいれば、現代でも驚くのは確かでしょう。イエス様が、「**安心しなさい。わたしだ。恐れることはない**」と言われ、舟に乗り込むと、風は静まるのでした(マルコ 6:50-51)。

4章35節から41節、同じようにガリラヤ湖上、舟で困難な状況になったお話がありました。その時、イエス様は風と湖を叱り、静かにさせました。しかし、その時、イエス様と一緒に乗っていました。今回、イエス様は夜明けごろ、湖の上を歩いていたのです。驚くのは当然です。しかし、福音書は、「**弟子たちは心の中で非常に驚いた。パンの出来事を理解せず、心が鈍くなっていたからである**」(マルコ 6:52)と語り、弟子たちが怖がったのは、すぐ前の物語のパンのことを理解できずに、心が鈍くなっていたからだと説明します。「心が鈍くなる」とは、「心が頑なになる、心が堅くなる」ということです。弟子たちが恐れた原因は、五千人の食事の物語を理解しなかったことと関連させているのです。

それでは、福音書は、暗い湖の上でこの出来事と、五千人の食事の出来事とを、どのように関連させているかということ、直接的には示されていません。ただ共通点を取り上げると、人間的観点、あるいは普通感覚では、五千人の食事は理解できず、同じように湖の上を歩くイエス様のことも理解できないということです。しかし、弟子たちの反応は決して間違っていないのです。暗い中で、自分たちだけで苦勞しながら舟をこいでいる時、突然、水の上を歩いてくる人がいれば、それは普通ではありません。弟子たちの反応は、理性的であり、また自然である、福音書はそう描いていると思います。しかし同時に、そこに人間が陥りやすい間違いがある。そう語っているとも思います。

本日のエフェソ書が当たっている事柄は、「**主は一人、信仰は一つ、洗礼は一つ**」(エフェ 4:6)とあるように、教会の一致を求めています。1世紀の教会も今もそうですが、教会は様々な人の集まりです。しかし、単なる集まりではなく、主なる神様が一つであるから、すべての人は、一つにされるという意味での集まりです。そしてその一つという根底があるがゆえに、一人一人に異なった賜物が与えられて、それぞれ役割を担うのです。エフェソ書は、直接、弟子という言葉を用いて表現していませんが、教会でそれぞれの役割を担うことが、弟子として歩むことにほかなりません。また、教会でそのように弟子として歩むこととは、それぞれの意志と努力でなったものではありません。主なる神様が、復活したイエス様を通して招いてくださったので集められたのです。そして、一つにされるのです。スポーツの偉人たちが集まるオリンピックとは異なること

はもちろんです、様々な賜物を持ち寄って何かを達成するボランティア団体とも異なります。

だからこそ、次の事柄、「こうして、わたしたちは、もはや未熟な者ではなくなり、人々を誤りに導こうとする悪賢い人間の、風のように変わりやすい教えに、もてあそばれたり、引き回されたりすることなく、むしろ、愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長していきます」(エフェ 4:14-15)に続きます。すなわち、人間的な思いの現れである、「教え」に惑わされてはならないということです。

エフェソ書が、何に対して警告を語っているのか。歴史的背景を考えれば哲学的な思考です。それは、主なる神様について、イエス様について、そして、教会について既存の哲学的な理解を用いて、人間的な思考で考えることへの警告です。それは決して、思考停止を求めていることではありません。教会も人間の集まりである以上、人間が何かを判断、決定、そして実行する組織です。しかし、その根幹が人間の思いに占有された場合、単なる人間の集まりになります。教会は、人間の思想や考えによって一つになるのではなく、主なる神様が一つであるから、一つにされるのです。

現代社会は、いろいろな意味で混乱の中にあります。その混乱は、一言では説明できないほど、政治、経済、軍事、文化ありとあらゆる事柄に関係しています。それは言い換えれば、人間の思いが、すべての行動の根幹に置かれ、それが当然のように多種多様に及び、対立しあっているということでしょう。そして、情報があまりにも多すぎ、新聞やTVなどの既存のメディア、そしてネットなどの新しいメディアを含めて、そこから出てくる情報自体の信頼性の問題も関係し、混乱がより深まっています。コロナ禍について、ありとあらゆる情報があり、専門家の意見も様々であったのはその一例でしょう。

人間の思いが根幹に置かれたとき、そこから生まれる歩みは、人間の範囲を超えず、結論となるのは、勝ち残った思いが正義となるということです。そのことに徹したら、どのような手段を使っても、勝ち残った人間が正義となります。生き残った人だけが歴史を記すように、勝ち残らなければ、意味がありません。そのような現象は、十字架の死という敗北の姿を通して愛を示したイエス様とは正反対の歩みです。また、正々堂々と競い合って、たとえ負けたとしても、それを見ている人々に感動を伝えるスポーツとも異なっていると思います。

エリシャが弟子として継承したのは、エリヤの業や技術ではなく、主なる神様がエリヤに与えた霊(賜物)でした。イエス様の弟子たちの失敗は、人間的にイエス様から何かを継承しようとしたからでした。しかし、彼らは、失敗したからこそ、人間の思いを超えて、主なる神様の愛を知り、それを伝える歩みが生まれました。それが教会です。その歩みを続ける教会は、約二千年を経過した今も、完成した姿をしていません。発展途上です。「愛に根ざして真理を語り、あらゆる面で、頭であるキリストに向かって成長」中です。社会が混乱しているからこそ、共に祈りつつ、教会ならではの歩みかたを、ご一緒に見出したいと思います。そして、世界に愛を示していきたいと思います。